

学位論文審査の要旨

学位申請者	原田 佳織 2021年9月 単位修得退学	論文題目	第三共和政前期パリとその郊外の市区庁舎装飾画における 人生の諸段階の主題(1872-1906)
審査委員	主 査:	天野 知香 教授	学位論文の全文公表の可否 : 否 「否」の場合の理由 <input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む <input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある <input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている <input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている <input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について
	副 査:	安成 英樹 教授	
	副 査:	田中 琢三 准教授	
	審査委員:	新實 五穂 准教授	
	審査委員:	陳岡 めぐみ 国立美術館本部 主任研究員	
学位名称 (英語名)	博 士 (人文科学) (Ph. D. in Art History)		

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのパリとその郊外の市区庁舎に設置された装飾画に、西洋において伝統的に存在してきた「人生の諸段階」の主題が多く見られることに着目し、その政治的社会的な状況と市区庁舎の機能の側面を合わせて視野に入れ、この時代のパリおよびその郊外の市区庁舎のこの主題に関わる装飾画全ての調査、分析を行い、当時の政治的イデオロギーやジェンダー観、家族観を含め、その表象の意味を分析し、明らかにしたものである。中世においてはキリスト教的な倫理と結びつきながら展開され、その後大衆版画などでも展開された「人生の諸段階」の主題は、19世紀末に入ると女性の一生とそのセクシュアリティを当時のジェンダー規範やその逸脱における「ファーム・ファタル」図像との関連の中で展開するものが多く見られ、美術史ではこれまでこの主題の象徴主義時代におけるこうした側面がもっぱら論じられてきた。しかし原田さんはこの主題が特に第三共和政前期において市区庁舎装飾に頻繁に登場することに着目し、この主題が、市区庁舎が司る市民婚をはじめとする機能とそれに伴う市民倫理や共和政下における政治的社会的なイデオロギーと密接に関わった即面を明らかにした。そもそもフランス近代美術史においてピュヴィス・ド・シャヴァンヌなど特定の画家の作品を除くと、公共装飾、特にパリおよびその郊外の市区庁舎の装飾の研究はほとんど手が付けられないまま今日に至っていた。原田さんの研究は、従って、先行研究や図版資料さえほとんどないこの研究対象を、市区庁舎を一つ一つ訪ね歩いて装飾を撮影し、その設置状況や場所を確認し、同時代の市や区の装飾画選定に関わる議事録や作品発表時の批評など一次資料を掘り起こす形で、初めてその装飾の制作や選定の実態、そして作品表象の意味を明らかにした。本論においては、1870年代に寓意像として展開されていた市区庁舎の装飾が、古代ガリアの表象を伴う歴史画的な主題に展開する一方、同時代の自然主義的な動向と連関しながら都市のモダニズムや農村の理想化された表象を伴い、さらに世紀末に至って伝統的寓意を継承する象徴主義的な表象へと展開する実態をそれぞれの制作を担った画家の特質とともに跡付け、各作品を美術史的な知見をもとに詳しく分析した。

最初の審査では、審査員たちから一様に本論文が非常な労作であり、その研究意義の重要性が指摘され、それぞれの事例に関する分析や見解に関しても概ね無理のない適切な議論であることが認められ、博士論文として極めて高い水準にあることが評価された。一方でケアレミスや用語、文章の部分的に不適切な箇所の指摘に加え、「人生の諸段階」主題が自明のものとして論文が始められている点が本論の理解を困難にしている点や、結論が内容のまとめに終わっており物足りないと言った点を中心に意見が出、序文と結論を中心に全体に修正を加えることが求められた。原田さんはこれに応え、2月初旬に修正版を提出し、第二回の審査をメール審査で行った結果、若干のさらなる修正意見が付されたが、全体として適切に修正が行われたとみなされ、公開発表に進むことが許された。またこの時の修正意見については、可能な範囲で公開発表前に修正を行い、了承された。公開発表では論文内容に関わる複数の質問に誠実に応答がなされ、最終審査において、原田さんの十分な学識や能力が確認され、博士(人文科学)の授与が審査員全員から認められた。